

PICK UP MOVIE

『アンデス、ふたりぼっち』

[2017年／ペルー／アイマラ語／86分]

監督・脚本・撮影：オスカル・カタコラ

編集：イレーネ・カヒアス

出演：ローサ・ニーナ、ピセンテ・カタコラ

消えゆく文化 私たちはどう向き合うのか



悠大なアンデス山脈、標高5千メートルという高地に暮らす老夫婦。見渡す限りの大自然のなか、この二人以外に人の姿はない。皆次々に山を下りて行ってしまったのだ。

この作品はペルーで初の、アイマラ語という先住民族の言語で作られた長編映画だが、ペルー本国では大ヒットを記録したという。アイマラ語話者は全人口の1パーセントもないというのに、だ。観客たちは、アイマラ族に今も息づく自然のなかで暮らすための奥深い知識、それに現代社会とはかけ離れた世界観、に魅せられたのだろうか。

厳しい自然のなかで、老夫婦は季節の巡りに合わせて日々を暮らす。春が来れば大地の神に祈りをささげ、豊作を願って種を蒔く。羊毛から糸を紡ぎ布を織る。しかし老いの身に、日々の作業さへ辛いとを感じる時が訪れる。くわえて自然は過酷な試練を課してくる。夫がついに力尽きて亡くなると、一人残された妻は思わぬ行動に出た。

死に向き合うその日まで、二人が切望していたのは、町へ出て行った息子が帰ってくることだった。町が何故それほど息子を惹きつけるのか、両親には分からない。彼らにとって山は聖地、動植物や自然は兄弟も同然、この場所こそが戻るべきところなのだから。

とは言っても、人口が大都市に集中し、文化も都市部に占有されるのは世界的な現象だ。私たちが現に、同様の問題に身をさらして生きている。しかも身辺に目をやれば、自然豊かな信州に暮らす私たちの生活さえも、物質文明に依存しきってはいないか。そんな私たちが、辺境に追いやられ消滅の危機にある文化に、どう向き合えばいいのだろうか。

1月半ばに上映される『アイヌの結婚式』『チセ・アカラ われらいえをたてる』は、1970年代に北海道の平取町二風谷(にぶたに)のアイヌ集落で撮影された。いったんは消滅してしまった古来の習俗を復活させるために行われた行事を、記録に残そうとした作品だ。日本で消滅の危機にある伝統文化について考える機会になると思う。